

コイの増殖手法に関する研究

内水面研究所

背景、目的

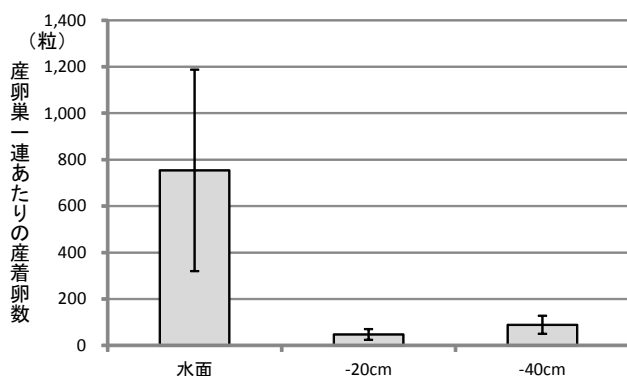
コイは本県内水面漁業の重要魚種ですが、平成16年度にコイヘルペスウイルス病が発生した後、まん延防止のために種苗放流は中断されています。このため、コイの漁獲量は大幅に減少し、漁業者からは放流事業の再開、もしくは放流に代わる新たな増殖技術の開発を望む声が大きくなっていました。

そこで、増殖効果が高く、漁業者自身が製作から管理まで実施できる、簡易かつ安価なコイ産卵巣の開発を目的として試験研究を行いました。

成果の概要

(1) 産卵巣の設置水深

キンランを水深別に設置した結果、水面では他の水深に比べてより多くの卵が確認され、産卵巣は表層に浮かせる必要があることがわかりました。



キンランの設置水深別産着卵数



キンランに付着した卵

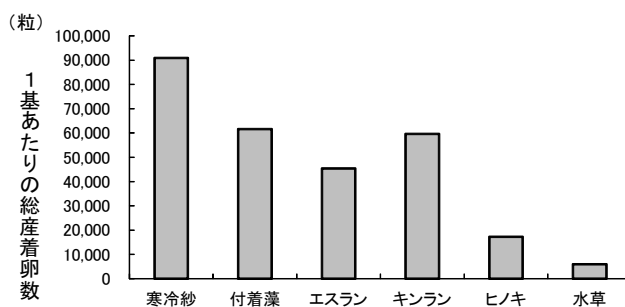
(2) 産卵巣の素材

各種素材に産着した卵数はいずれも天然の水草を大きく上回りました。素材別の産着卵数は、寒冷紗>付着藻>キンラン>エスラン>ヒノキ枝の順で多く、産着の安定性、耐久性、経済性及び管理のしやすさを総合的に評価すると、寒冷紗が最も漁業者に普及しやすい素材と判断されました。寒冷紗の総産着卵数は約9万粒であり、その製作コストは2,500円/基と安価でした。

本成果は、研修会や個別指導により漁業者へ普及し、現場での導入も始まりました。



産卵巣の構造 (寒冷紗の例)



素材別の産着卵数